

明日、死にたがりの君が 夏空に消えても

百度ここ愛 Cocoa Hyakudo



アルファポリス文庫

第一章 終わりにしようとした春の日

今日は、死ぬのにぴったりの美しい青空が広がる日だった。

みんなに嫌われないように、愛されるように。

そんな願いを込めて付けた笑顔の仮面は、私の心をいつだって締め付ける。そして、私の優しさはただ乱雑に消費されて、削り取られてしまう。

私が周りに押し付けるように配った小さな愛情は、雑に受け取られ、何も返ってこない。

親は姉だけが大切に愛しい、といっただって言動で示していた。

テストで百点を取っても、姉のお世話を代わっても、感謝の言葉一つ受け取れなかった。

ごはんの用意や掃除を「やっておいたよ」と報告すると、「あらそう」と当たり前のごことのように返答される。

淡々と感情のこもらない両親の言葉を聞くたびに、私の心は割れて粉々になって

いく。

それでも、褒められることを諦めきれずここまで生きのびてしまった。

友人なんでもものは、この世に存在しない。

学校でも、私は透明人間だ。

それなのに、クラスメイトは都合のいい時ばかり、「掃除当番代わって!」「さすが、頼りになる!」と友人面をする。班決めの時だっけそう。「私たちの班よりもっと仲のいい班がいいよね?」と私の押し付け合いが始まる。

できるだけ邪魔にならないように大人しくしていると、「何もしない」と文句を言われる。率先して動くと「でしゃばり」と陰口を叩かれた。

私はどうしていいのかわからなくて、ただ「ごめんね」と歪ひびな笑顔を作った。心の中は土砂降りのように濡れ荒すさんでいたのに。

思い返して、ため息が出そうになるのを抑え込む。

スマホを開くと、オススメに「前世、猫の犬」という動画が出てきた。

おばあちゃんの家この「いち」という名前の犬を思い出しながら、動画を見る。

かわいらしい柴犬が、猫のように香箱座こうばりをしているのを飼い主に褒められている。褒められた柴犬は、「くうん?」と鳴きながら、どこことなく嬉しそうに見えた。

動画の犬でさえ、羨ましく思ってしまう。

どうしても、この世界は息が詰まる。

この世には、私を受け取れる愛情はどこにも存在していないらしい。

だからもう死んでしまおう。そう、決めた。

死んでしまえば、悲しいことも、息が詰まることも、誰かを羨ましく思うこともない。

来世は猫とか犬がいいな。飼い主にひたすら愛されて大切にされている。

優しい手で撫でてくれて、私だけを見つめてくれるような飼い主のところへ。

幸せな来世を願って、足を進める。

潜り込んだビルの屋上は、家庭菜園に使われている。

学校帰りにたまたま見つけた穴場だ。エレベーター直通で、屋上まで辿り着ける。

家庭菜園用の土のスペースと、花が咲き乱れる庭園みたいなスペースがあった。マ

イナスイオンが出ていそうな、屋上のオアシス……

学校終わりに立ち寄った時は、友だちと雑談する学生たちも、家庭菜園をしに訪れる大人たちもたくさんいた。でも、お昼の時間は、人があまりいないことも確認済みだ。

何回も何回も考えて、探して見つけた私の最期の場所。使うことがないといいなと願いながら、見つけてしまった場所。

用心しながらエレベーターを降りて、屋上の扉に手をかける。

ガチャッと音が鳴って、扉は簡単に開いた。

屋上に出ると青い空が眩しく輝いている。

苛立つほどに澄みきった空だった。

私が死ぬというのに、憎らしいほど綺麗な青空に目を細める。

どす黒い感情がモヤモヤと心の中に積もっていく。空に反射する白が私の目に焼きついた。

正方形に区切られた畑の間を通り抜けて、フェンスに辿り着く。

この場所を見つけた放課後は、人が土にまみれていたのに、今はシーンと静けさだけが広がっている。

鳩尾あたりまでの高さのフェンス越しに下を眺めると、忙しなく人々が動き回っていた。

私が死のうとする日でも、人々は変わらない生活を送っている。きっと、私が死んだところで何一つ変わらない。

クラスメイトたちは傷ついた顔をして、いい人だったのにと嘯くかもしれない。でも、そんなのたった数時間のこと。

両親は、外ではいい子だったのにと泣くかもしれないが、家ではなんて面倒くさい

ことをしてくれたのだとため息を吐くだろう。

姉は、そんな状況を理解もせずに、「ミアちゃんはいつ帰ってくるの?」と呑気に両親に問いかけるに違いない。そんな姉が、嫌いだっただ。

親からただひたすら、赤子のように愛情を注がれ、純真無垢ですと顔に書いてあるような姉が。

それでも、姉のことを嫌いと言えば、学校では「冷酷な人」と嘲笑われ、家では叱られる。

嫌いだと口にできないことも、彼女のことが嫌いな要因なのかもしれない。

何も言えずに、抱えて消えていく。

私にお似合いの最後の気がして、泣きたくなくなった。

もっと、もっと違う人生がよかった。

誰かに、私を見つけてほしかった。

私を見て、私の名前を呼んで。

そう願うたびに、心臓は脈打って、私の足は震える。

何を思っても、今から変わることはない。わかっているから、死を選びにきたのだ。そして、誰の中でも私の死は、一日程度でそんなことあったねに変わってしまっただろう。

数週間後には、私の存在は記憶から消え去っている。

忘れ去った後は、ただ楽しい日常を、みな謳歌するんだ。

そんな私の人生に、なんの価値があるのか。

家族は……きつと忙しさに追われてすぐに私のことを忘れてしまう。

わかっていったのに、一人で考えて死にたくなった。死にに、きたのに。

ふつと軽く笑ってから、フェンスに手をかける。

強い風が体を揺らして、心臓がバクバクと鳴り始めた。

心臓の音を無視して身を乗り出すと、後ろから声がして驚いてしまった。

「ねえ、何やってんの」

「ひえっ！」

心臓が、力強く脈打つ。まるで、私の体じゃなくなったみたい。

変な声が出たな、とか、息が苦しい、とか、どうでもいいことばかり頭の中を通り過ぎていく。

フェンスを掴んでいた手は、はらりと解けてしまった。膝は震えてうまく立てないし、声も掠れてしまっ出てない。

へなへなと地面に座り込むと、目の前に声の主が立っていて「ごめん」と口にした。そつと目を向けてみると、小柄な男の子だ。

目を見開いて驚いている。

私のほうが絶対驚いたよ。一瞬、本当に死んだと思った。いや、死にきたのは、そうなんだけど。

男の子は隣にしゃがんでフェンスに体を預ける。そして、私に水を差し出した。

新品の水は、ちゃぶんとペットボトルの中で揺れて波打つ。

「手を付けてないから。飲んで」

ドキドキしすぎて、喉がカラカラだった。だから、遠慮なく受け取って水に口をつける。水が体に染み渡っていき、乱れていた呼吸が落ち着く。

死のうとしていたはずなのに、落ちると思ったら怖かった。

死にたくない、願ってしまった。

——まだ、生きていたい。

そんな言葉が、勝手に口から出そうになった。

「落ち着いた？」

ふうっと息を吐き出すと、男の子は顔を覗き込んできた。くりくりの目に、戸惑ったような眉毛。

「驚かせてごめん。死のうとしてるのかと思ったから」

「落ち着いた、でも、死のうとしてたのは当たってる」

素直に言葉が出てくるのは、もう会わない人だからだろうか。

クラスメイトとかだったら、こんなに素直に答えることはできない。

だって、そんなことを言ってしまうえば、メンヘラだとからかわれる。

そして、明日以降のいじめの語彙に「死に損ない」や「死ぬ死ぬ詐欺」が加わるだろうから。

脳内で出てくる言葉の数々に、つい嘲笑してしまう。スラスラと思いついてしまうこと自体が、毒されているなと思った。

「へー、なんで？」

男の子は、私の言葉を聞いて、驚いた表情もせず、淡々と返してくる。

驚いてほしかったわけでもないけど、あまりの淡白ぶりに私が驚いてしまった。

「死にたくなつたから」

「だから、なんで死にたくなつたの？」

「なんでって……長い話になるんだけど」

まあいつか、と考え直す。どうせこの後、死ぬんだし。長い話をしたところで、私には問題ない。

だって、後の予定はここから飛び降りて、人生にさよならするだけだもん。

自分で考えて、背中がぞくりと冷える。

死ぬと決めたのに、今更恐怖心が胃の奥から迫り上がってきた。

全部吐き出して、ここでうずくまって、駄々をこねたら、楽になれる？

そんなこと、しないけど。

私が生きてきた事実も、死ぬことを選んだ理由も、誰かに知ってもらえたら……

ほんの少しの希望に、縋りたかった。

数週間で忘れ去られるよりは、そのほうがまだ死にがいがあるだろう。

「聞いてくれるの？」

「君がよければ、君ってなんか言いづらいね。俺は渉、君は？」

「渉くん……私は、ミア」

「ミアさんがよければ、話してみてよ。って言っても、地べたに座りっぱなしより、あつちのベンチのほうがいいか」

渉くと並んで、ベンチまでの道のりを歩く。先ほどまで腰が抜けて地面にしゃがみ込んでいたのに、体の回復は思ったよりも早かった。

案内された通りに歩いていくと、ちょうど入り口からは死角になるようにベンチが設置されていた。エレベーターを降りたところにある小部屋——ペントハウスの横に二つ並びで置かれていて、一つには開いたパソコンと丸まったブランケットが置いてある。

「ここにいたの？」

「そう、君が屋上に来た時から。まっすぐフェンスのほうに歩いていくし、まだお昼なのに制服だし、なんだろうなあとと思って声をかけたら怖がらせちゃった。ごめんね」

空に目を奪われていたとはいえ、こんなすぐそばに人がいるのに気づかなかったとは。

心底申し訳なさそうな顔をした男の子をやっと、まじまじと見つめる。

春の日にしては、暖かそうな長袖を着込んでいる。

長い時間、ここに留まっていることの証明な気がした。

「ぜんぜん大丈夫！ 人がいるとも思ってなかったし、私こそごめん。きっと涉くんの、定位置というか、居場所だったんでしょ、ここ」

明らかにここにいたための、用意がされてる。

いつものように、相手のことを思いやって言葉を捻り出して、また自己嫌悪に陥った。

そういう自分も、すべてが嫌で死のうと決めたのに、私は結局死ぬ間際まで人ばかり気を遣ってしまっう。

「死にたがってるくせに、まだ誰かに気を遣うなんて不思議だね」

「本当だよ、死ぬんだから自分勝手にやっていいはずなのに」

笑って答えているうちに、瞳の奥からじわりと涙が溢れてきた。

泣くな、泣くな。泣いたら困らせてしまっう。

初対面の人に、泣き顔を見せるとか、ダサイことはしたくない。

「結局人にどう見られるかばかり考えちゃうのは直んないみたい」

「優しい人なんだね」

「へ？ どこをどうとつたら優しい人になるわけ。ただ単純に、普通の枠から外れるのが怖いだけだよ」

涉くんは太陽みたいな顔で微笑んで、そう言った私を見つめる。

あまりにも優しい眼差しに、胸がドキッと高鳴った。

さっきの恐怖からのドキドキが、まだ残っているのかもしれない。

涉くんがベンチに座って、どうぞと手のひらで隣を示す。

大人しく座れば、ブランケットを膝にかけてくれる。

「春とはいえ、長時間外にいたら寒いから」

「ありがとっ。涉くんこそ、優しい人なんだね」

「そう？ でも優しい人でありたいとは思ってるよ」

当たり前のことのようにつぶやいて、パソコンを閉じる。

そして、私に少しだけ膝を向けて「それで？」と口にした。
話すと決めて付いてきたのは自分のはずなのに、言葉がうまく浮かばない。
死ぬことに決めた理由は簡単に思いつくのに、いざ話そうとするとためらいが生まれた。

「パソコン、何してたの？」

誤魔化すために選んだのは、目に入ったパソコンだった。

涉くんは、パソコンを軽く持ち上げて、悩んだように小さいため息を漏らす。

「うーん、ミアさんの死ぬ理由を聞いた話すよ」

どうやら私が先に説明しなければいけないらしい。

もう会うこともない他人だしいいか、と思った数分前の私はどこに消えたのか。

言いづらい、言いたくない。

だから嘘でも本当でもない言葉を、憎らしいほど青い空を見上げながら口にする。

「生まれ変わりたいの。犬とか猫に」

心の底から願っている本心。でも、死ぬ理由ではない。

ぎゅっと、握りしめた指先が白く染まっていく。

涉くんは納得していないようで、続きを待つようにじいっと私を見つめている。

急に恥ずかしくなって、ぶわりと体中に熱が回った。

「愛されてないの、私」

「親から？」

「親からも、周りの人からも。誰も私を見たくないなら死んで生まれ変わってやろうと思って！」

「愛されたい、ってこと？」

一度答えてしまえば、言わなくてもいいことまで、スラスラと口が勝手に動く。

今まで誰にも言えなかった。

私を見てほしい。

愛してほしい。

それを言うのは自己中だと思っていたし、ダメなことだと思っていた。

それなのに、何を言っても「それで」と続きを促すように、涉くんが私の言葉を待ってくれる。

もう二度と会うことのない他人だと思えば、ずっと秘めていた言葉を口にできた。

「愛されたい。生きていていいよって、私のことを認めてほしい」

人前で泣くという恥ずべき行為をしてしまったのは、完全に気が緩んでいたとしか思えない。抑えようとしても、涙はぼろり、ぼろりとこぼれ落ちていく。

「じゃあ、僕が愛をあげるよ」

「嘘。私のために用意された愛はこの世にないの。だから、来世に期待してるんだよ」

「来世なんてないよ」

「何それ、あるよ」

「人からの愛は信じられないくせに、来世は信じられるの？」

「愛は信じられるのに、来世は信じられないの？」

「バカにしたような言葉が出てしまつて、涉くんの顔を慌てて窺う。」

そんな言動は私が一番嫌だったくせに、他人には平気でやってしまう。自己嫌悪が胸の奥で募つて、吐き気がした。こんなところで、母との血のつながりを実感などしなかったのに。

「ごめん……」

「大丈夫、ミアさんちよつと動揺してるんだよ」

「涉くんは、どうしてそんなに優しいの」

「うーん、僕がやってたこと、聞く？」

さっきは私が死ぬ理由を聞いてからと、はぐらかしたくせに、涉くんは恥ずかしそうに私の目を見つめた。

「誰かを救える人でありたいんだ、かっこつけてるみたいだけど」

「救える……って、だから、私が死のうとしてたのを止めたの？」

「余計なお世話なのはわかつてるよ。でも、目の前で死にそうな命には、手を伸ばしたい」

涉くんは真剣そうな顔で恥ずかしそうに肩をすくめる。そして、パソコンを開いて私に画面を見せた。画面上は、びっしりと文字が埋め尽くされている。

第一章から始まる文章は、全部を読みきらなくてもわかる。

「小説を書いているの？」

「そう。昔から体が弱くてさ、楽しめるものが小説とか、漫画とかだったんだ」

「読ませて！」

つい口から出たのは、そんな言葉だった。楽しそう、ワクワクする。

久しぶりの感情は、死にたい気持ちとの高低差でジェットコースターみたいにぐわんぐわんと動いていた。

「それは、ちよつと、恥ずかしいな」

涉くんはぱたんつと目の前でパソコンを閉じて、ケースの中にしまい込んでしまう。こんな真つ昼間から、私服で小説を書いてる男の子。

見た目は同じ年くらいに見えるのに。

涉くんは大切そうにパソコンが入ったケースを胸に抱いたまま、顔を上げた。

「いつか、書き終わったら見せるよ」

「それまで死ぬなってこと？ 約束して生きのびさせようみたいなずるい魂胆？」

いつもは取り繕っている仮面が、ぱりんと割れていく。

涉くんはそんな私の嫌味にも、とても冷静に返す。

ああ、こうやって、素直に話せるって、楽なんだな。

実感したけど、クラスメイトや家族にそう振る舞うところは、想像がつかない。

「ううん。素で話してた。そっか、死のうとしてたんだもんね、うーん」

「素で忘れてたってこと？」

たった数分前に死ぬ理由を話したばかりなのに、すっとぼけたような答え。

つい、くすくすとして笑ってしまう。涉くんと話していると毒が抜けていく感覚がする。

ちらりと目の端には、青々と茂った草が目に入った。

この先、どんな蕾を付けるんだろうか。

想像も付かないけど、きっと美しい光景に違いない。

咲き乱れる花を想像してしまって、空に目を逸らす。

想像だけでも私には、あまりにも眩しかった。

先ほどまでは、苛立たいいほど透き通っていた空に、薄い紫色が混ざっている。

落ちていた空の色に、流れていくクリーム色の雲。

おいしそうだな、と考えたら、少しだけお腹が空いた気がした。

隣で笑っていた涉くんに目を戻す。涉くんのことが、少しだけ気になった。

昔から体が弱いとは言っていたけど、どうしてこんなところで小説を書いているのだろうか。

学校には行っていないのか。

いくつなのか。でも素直に聞くには出会ったばかりだし、まだ死にたい気持ちが大きすぎる。

まじまじと見つめていた私に気づいて、涉くんが「ん？」と声に出した。

「涉くんはどうしてここで小説書いているのかなあって」

「気になる？ まあ気になるから聞いたのか」

「そうだね、教えてくれる？」

「いいよ」

パソコンが入ったケースをベンチの上に置いてから、涉くんは透き通った目で空を見上げた。

まっすぐに見つめる目が、青空と同じくらい眩くて、まばたきを繰り返す。

「学校には通ってないんだ。でも、家に籠こもってても誰もいないし」

「一人暮らしなの？」

「違うけど、まあ父さんも母さんも忙しいんだ。僕の体のためにいっぱい稼ぐーって」

愛されているんだな、と思った。羨ましいというよりも、素直にそう思った。

渉くんがぐーと手を握ったり、広げたりを繰り返す。

私に手を差し伸べる。握り返した手は、やけに細い。

春の日差しが暖かいとはいえ、長時間いると冷えてしまうのだろう。渉くんの右手は、ひんやりとしていた。

「で、見ての通り元気に運動できるような体でもないし、散歩が趣味なんだけど」

「それでここを見つけたってこと？」

「そうそう。ある人がフラフラと歩いていくのに付いて行ったら、見つけてね」

うんうんと大きく頷いて、私を握っていた手を放した。そして、水を一口飲み込んでから、わざとらしく「んん」と喉を震わせる。

「で、小説書くのに、なんてびったりな場所だろうって」

フェンスの向こうを見渡してみても、青空を見上げてみても、私にはわからない感覚だった。暖かいわけでも、電源タップがあるわけでもない。

私の疑問を感じ取ったのか、渉くんは少しだけ笑う。

「キレイな空に近づけて、人の営みが目に入るだろ」

「それは、確かにそうかも」

どこにいるよりも、空に近い場所な気はする。

フェンス越しに下を覗き込んだ時も、行き交う人々が目に入った。

それに、二人きりで話しているのに……

ざわざわとした話し声が、内容まではわからないものの、かすかに耳に聞こえる。

一人じゃない。そんなことを、思ってしまう場所だった。

「このよさがわかるなんて、ミアさんも通だねえ」

「って、小説を書いている理由は言っていないよね」

「どうしてここで書いているの？ ってことじゃなかったんだ」

ふはっと噴き出して、身を振る。

たぶん、わざとだ。わかっているくせに、濁っていた。

そう気づいて、私を引き止める渉くんの優しさが目に染みる。

「いつか、教えるよ」

「小説を書いている理由？」

「本当の、ね」

ふざけたような言い方なのに、どこか嬉しい。

私もふっと笑って返すと、驚いた顔をされる。

「まだ、死にたい？」

ぼつりと問われた言葉に、黙って考えてみる。

帰るのは、やっぱり嫌。学校に行くのも、やっぱり嫌。どちらも、辛いことには変わりない。

「学校も家も極力いなければいいんじゃない？」

「へ？」

「僕は、大体ここにいるからさ。時々来てよ」

そんな誘いに、心が揺れ動く。

死ぬつもりだったはずなのに。

断るという選択肢が出てこない。

涉くんにまた会ってみたい。でも、帰りたくない。私は、まだ死にたい。

「約束しよう？」

「また、会いにくるって？」

「ダメかな？」



涉くんと出会って一時的に、死ぬことをやめた。「また会う」と約束してしまったから。

それでも、私の地獄は一切変わることはなく、地続きのまま私を苦しめていた。

両親は、いつだって姉が最優先で、家の中にいると私だけ家族じゃないみたい。

自分で焼いたトーストをお皿にものせず、手に持ったまま齧る。

母がせっせとごはんを出して、「早く食べなさい」と姉に声をかけるのを眺めた。

朝ごはん、私はいつから作ってもらえなくなっただっけ？

「もう中学生なんだからそれぐらい自分でできるでしょ」

そんなことを言われた記憶はある。

家族みんなでダイニングキッチンテーブルに座っているのに、私の席だけぼつりと浮かんでいるみたいだ。

飲み込んだはずのパンが喉の奥に張り付き、水分を奪っていく。

両親は変わらずに、姉に話しかけていた。姉といえば、テレビに夢中でパンにも手を伸ばさない。

「しょうがないわねえ」

母はそんなことをつぶやきながら、姉のトーストに、濃い赤い色をしたいちごジャムを塗りつけていた。嫌気がさして口を出そうかとも思ってたけど、私には無理だった。余計なことをしない。

両親の手を煩わせない。

小さい頃から刷り込まれた習慣は、なかなかに抜けないみたい。

味のしないトーストを無理やり、流し込む。

ちくんと胃が痛んだ気がしたけど、気のせいだろう。ジャムやバターを塗る気は、一切起きなかった。

楽しそうにごはんを食べる家族を視界の端に映しながら、手も合わせずにあいさつをする。

「ごちそうさまでした」

私の小さい声は、リビングにのみ込まれる。誰からも返ってこないことは、わかってきた。

もう、泣きそうになることもない。諦めに似た感情が胸の中を支配している。

それなのに、姉が楽しそうにしているのを見ると、ずきんと頭が痛む。

羨ましくなんてない。泣きたくもない。こんな家族、どうでもいい。

私には目も向けず、母は姉のかわいらしい桜柄のお皿にスープをよそう。

これも私はもらえなかったものの一つ。

春に生まれたから「桜」と名付けられた姉にびったりだと父が買ってきた、姉専用のお皿だった。

私専用なのは、ほとんどないのに。姉専用のものであれば、充実した家だった。

姉のほうが先に生まれてるから、当たり前かもしれないが。その事実すら、私の胸に痛みとなって根を張る。

定期的に襲いくる「ちくん」という痛みを、無視することにも慣れてきた。

ちらりと姉を見ると、無邪気にいちごジャムを塗られたパンを食べながらおしゃべりを続けていた。

「明石先生に、芸能人に似てるねって言ったら——」

何度目かわからない言葉に、母は隣の席で相槌を繰り返す。父はといえば、私の隣で満足そうに笑っていた。

姉はきゃはきゃはっと笑い声をあげて、手を叩く。

何が楽しいのかわからない私は、視線だけを送って、家族の輪を抜けた。

リビングから私がいなくなっても、両親と姉は気づかない。

だって、変わらずに同じ話を繰り返している姉の声が、扉越しに、かすかに聞こえ

ている。

学校に行きたくもないのに、体は素直に準備し始める。

自分の心に従わないこの体が恨めしい。リュックを背負って、足音を立てないように玄関に急ぐ。

「ミアちゃん！ いってらっしゃい！」

いつのまにかごはんを食べ終わった姉が、私の後ろから声をかける。

やけに甲高い声に、苛立つ。

光沢がくすんできた、窮屈なローファーに足を入れた。

スーパールの靴屋さんと、一番安かった黒のローファー。

かわいいローファーや歩きやすそうなスニーカーはたくさんあった。

私が欲しかったのは、茶色でリボンがついていたかわいいローファーだったのに。

でも、そのローファーはこれより高かった。

あの時はまだ、少しだけ希望が残っていたのかも。

入学祝いだよ、とか、高校生だからね、とか、両親からの甘い言葉を期待してしまった。

試し履きして顔を上げた時には、父が「こっちでいいだろう」とレジにこの安物のローファーを持っていく途中だった。その時、私の意見は、決して採用されることは

ないと悟った。

履き慣れてくれば愛着が湧くかとも思ったが、ただ摩耗しただけで感情は湧かない。カカトは傷がついてるし、光沢はまるで最初からなかったかのような見た目になっていた。

「ミアちゃん！ 学校行くの！ がんばってね」

お前に言われなくても……！

そんな言葉が出そうになって、のみ込む。

言ってしまった、また「お姉ちゃんには優しくしなさいって何度も言ってるでしょう！」と母からの怒鳴り声に晒されるだろうから。

歪な笑顔を作って、喉の奥につっかえてる言葉を口にする。

「うん、いってきます」

振り返りもせずに口にする、姉はきやはきやはと笑い声をあげる。そして、また「がんばるんだよ！」と偉そうに私に言ってきた。

言い返したくなって、振り返るとリビングの扉から顔を出す母と目が合う。

能面のような顔に、吐き気がした。

先ほど、姉にニコニコしてごはんを食べさせていた表情とは、打って変わって冷えた顔。

その目には「わかってるよね？」という言葉が、書かれていた。

「うん、じゃあ、お姉ちゃんも今日もがんばってね」

下手くそな笑顔でそう言うのと、姉は心底嬉しそうな顔で両手をブンブンと振る。父がその後ろで忙しくスーツを着込んで、玄関まで走ってくるのが見えた。

「じゃあ俺も行ってくるな！二人とも気をつけて」

そう言っ、母と姉にハグをする。いたって普通の、素敵な家族のような光景。それを目にしないように、逃げるように家を出た。「二人とも気をつけて」の、「二人」はどちらに言ったんだろうか。

少しだけ期待が胸の中で頭をもたげて、しおしおと萎しおれていく。

同じ時間に出るのに、同じ方向に行くのに、一度も、並んで歩いたことなどない。それが、ただ一つの答えだってわかってた。

私がいなくなつて、みんなまた家族ごつこを始めるんだろう。

私一人だけ、どこにも身の置き場がないというのに。

学校も変わらず、私だけを異物のように受け入れる。

他の子たちは友人たちと会話を楽しみながら、弾むように校舎に入っていく。

私は、ただ一人、ぼつんと歩いている。

昇降口では、先生たちが朝のあいさつ運動をしていた。

朝から元気な声が、校舎に響き渡っている。

「おはようございます！そこ、スカート短いぞ」

自分の下駄箱を開けると、みんなと同じはずなのに薄いグレーに染まってしまった上靴が目に入った。

床に投げ捨てるように置いて、気に入らないローファーをしまい込む。

見るたびに胸の奥でちくちくと痛むくらいなら、祖父母からもらったお年玉を使つても、欲しいローファーを買えばよかった。

上靴に履き替えると、先生とバッチリ目が合う。

つま先を地面にトントンとして、足に合わせる。先生の前でびたりと立ち止まって、キレイなお辞儀をしてみた。今日は、うまく笑えている気がする。

「先生、おはようございます」

「おはよう。若月わかづきは、しっかりしているな。制服もバッチリ校則通りだな。今日もがんばれよ」

「はい、ありがとうございます」

迷惑をかけない、いい子でいなくちゃ。いい子でいれば、先生たちは私の名前を呼んでくれる。がんばれよ、と声をかけてくれる。

家でもクラスでも、誰からも見てもらえない私が、唯一誰かに認められる方法。だから、いい子を心がけていた。

いい子でいなければいけないという重圧は、体の中心を抉^{えぐ}っていく。

まるで、勝手に誰かに体を操^さられているかのように、先生に朗らかにあいさつをした。

他人の顔色ばかり気にするようにインプットされた脳を今すぐ取り出したい。そして、床に叩きつけて、踏みつけたい気持ちにも駆^くられた。

助けて、と言えば、変わるだろうか。そんなことはないとわかっているけど。

ぐっと唇の端を噛み締めて、手のひらを握りしめる。

ここからも気分が重たい時間は続く。

登下校の歩いている時間だけが、私にとつての心穏やかな時間かもしれない。

先生は、私のそんな微妙な表情の変化に気づかず、また次の生徒に「おはようございます」と大きな声であいさつを繰り返していた。

教室に向かうまでの廊下が、やけに長く感じられる。

このまま、永遠に着かなければいいのに。

脳裏に浮かんでしまった思いは、果たされることはない。

教室には、どうしても、辿り着いてしまうものだ。

扉の前で、深呼吸を繰り返す。すうーと吸い込んだ空気は、ホコリっぽく、むせてしまいそうになった。

教室は、外からでもわかるくらいに騒がしい。黙ったまま扉を開けると、クラスの子たちがこちらを確認してクスクスと笑い声をあげた。

笑い声の中心は、やっぱり西音^{じいね}さんだ。

西音さんは、茶色に染め上げた髪の毛を、くるくると人差し指で弄^{もてあそ}ぶ。爪はキレイな色で彩られ、顔には注意されない程度の化粧を施している。

スツと通った鼻筋と、ふんわりとした雰囲気で、クラスの中でも目立つ存在だった。そんな西音さんは、私を見つめて声をかけた。

「おはよ、ミア！」

まるで親しい友人かのような表情で、私に白い手をひらひらと振る。ここで、知らんぷりをしたら……どうなるか想像してみても、やめた。

胃の奥がジクジクと痛くなってくる。

「おはよう、西音さん」

「明るくないなあー！ 朝だよ？ もっと声出していかないと？」

「おはよう！」

できうる限り、笑顔を作って、声を張り上げる。

ひくひくと唇の端が揺れたのも気にせず。

「声がちっさいよ！ もっと出るって、ほら、おはよう？」

西音さんの目には、光がなくて感情が読み取れない。

本人は、「仲よしだから心配なの」といつも言うけど。

本心は……なんでもいい。私には抵抗は許されていないから。抵抗したらどうなるかは、簡単に想像できてしまう。

殴られたり、変な噂を流されたり……

それなら、まだいいかもしれない。

西音さんたちがよく撮っている動画に無理やり出されて、ネットに情けない姿を晒されるかも。

想像して、背筋がぶるりと震えた。

そんなことをされるくらいなら、無視やいじりのほうがまだマシだ。

「おはよう！」

お腹の底から声を出すと、クラスメイトたちが一斉に振り返る。クラス中がしいーんと静まり返り、乾いた笑い声がかすかに聞こえた。

氷のように冷たい視線が突き刺さり、「またかよ」という言葉がその上を走っている。

それでも、普通のことのような顔に戻して席に向かう。その様子を見ていた西音さんたちは、口に手を当ててぶつと噴き出す。

「ミアってば、本当おかしいんだから」

そんな言葉に、体中がバラバラと解け落ちそうだった。でも、否定することもできずに、小さく答える。

「本当におかしいよね」

遠くに響く私の声は、誰か他人の声のように耳に聞こえる。

西音さんたちは、もう私に興味がなくなったらしく、ネイルの話をし始めていた。

「毎日毎日いじめられてんのに、よく学校来れんね」

聞こえた声は、話したこともないクラスメイトの声だった。

くすくすとバカにしたような笑いを含んでいて、私を心配したものではないことだけはわかる。

私だって来なくていいならこんなところ来たくない。

先生は優しいし、私を見てくれるけど、クラスはやっぱり息が詰まる。

はあため息をこぼしたい気持ちを堪えて、席に座る。机の中に、慎重に手を入れたと今日は空だった。

よかった、何も入ってなくて。

机に集中していた私の肩に、ずしんと誰かの両手が置かれる。頭の真上から聞こえてきたのは、先ほどの西音さんの声だった。

「いじめじゃないよ、愛のあるいじり。ねっ、ミア、イヤじゃないもんね？ 友だちだもんね、うちら」

「いじめてなんかいいない。西音さんは、ミアを明るくしようとしてるだけだもんね」

西音さんの友だちも同調してケラケラと笑う。

肩の重みに耐えきれなくて、このまま崩れ落ちてしまいたいそうだった。

でも、そんなことはできない。これくらいまだいい。

ケガをさせられたりはしないし、筆記用具や教科書が壊されたり汚されたりもしない。

これは、いじめじゃない。

それでも、死にたいと思うには十分なくらい、このクラスにいることは苦痛だった。先ほどの声が聞こえた先を遠く見つめても、誰が言ったのかはわからない。

男の子の声だったことだけは、わかったけど。

「まあ本人がそう言うならいいけど」

声の主と目が合ったかと思えば、ふいつと逸らされてしまう。ここで、いじめだと

私が言ったところで、助けてはくれないことを確信してしまった。

胃酸が喉の奥から迫り上がってきて、吐き気がする。

トイレに行きたいと思ったけど、西音さんの手を撥ね除けて行くのは面倒だった。抵抗しないんじゃない、面倒なだけ。

学校での出来事はやっぱり私の気分を重くする。だから、学校が終わったら逃げよう。また、涉くんに会いに、屋上に来てしまった。

死のうと決意してから、数日しか経っていないのに。もう、会いたくなってしまう。いる。

どこにも、私の居場所はない。

涉くんの隣が居場所かと言われれば、そういう感じでもない。

まだ会って数日だし。

エレベーターを降りて、扉を開ける。ひんやりとした風が屋上に吹き付けていて、私の髪の毛を巻き上げていく。

沈みかけている夕日が、目に映った。この屋上は、やけに空がキレイだ。

夕方の空は、薄紫色とオレンジ色が混ざり合っている。

屋上の家庭菜園は、夕方の時間帯は人が多い。

庭園のような木々の下では、制服を着たままの高校生が語りあっているし、エプロンをつけたままの主婦は、トートバッグからはみ出た大根を大事そうに持ち歩いている。

スーツ姿のサラリーマンも仕事終わりなのか、コーヒーを飲みながら木でできた床を踏みしめて歩いていた。

多くの人で、賑わっている。でも、誰一人、扉を開いたこちらに顔を向けることはしない。誰かと楽しそうに過ごしたり、土と向き合い緑の植物と戯れたりしていた。

涉くんの定位置である、ペントハウス横のベンチを確認した。

涉くんとぼつちりと目が合って、つい、ホッとしてしまう。私に気づいて、手を上げて、微笑んでくれた。

「来たんだ」

「ダメだった？」

「ううん、嬉しい。はい、どうぞ」

この前よりもやけに大きなリュックが、置かれていた。

そのリュックが開かれたかと思うと、お尻に敷くクッションが出てきた。柴犬の形をした、茶色のクッション。それをベンチに置いて、私を手招きした。

「くるかな、と思つてリュックに入れていたんだ。袋あるからさ、持つて帰りなよ」

「くれるってこと？」

「だって、このベンチ、座り心地がよくないから必要でしょ？」

まるで、この先何回も訪れると決めつけるような言葉に、つい、ふふと笑い声が出た。

心がほんのりと、温かい。

「ここにいていいよ」と言われたみたいな気がしてしまったから。

ありがたく座ってから、私もカバンから水筒を取り出す。

中学に入学したから、とおばあちゃんが贈ってくれた。誰かから、贈られた唯一の私だけのもの。冷たいものも、温かいものも入れられる優れものだ。

おばあちゃんとは、もうしばらく会っていないけど……

涉くんは、パソコンを閉じてぐーっと背伸びをする。そして、リュックをもう一度開いて、今日は市販のドーナツを取り出した。

「一緒に食べよう」

ほのぼのとした声に、つい心が緩んでしまう。

こくと頷いて、手を伸ばしかけてやめた。

私も、涉くんに渡すものがあつた。

夕方の時間は寒いだろうと予想して、あつたかいお茶を持ってきた。二人で分ける

れるように、紙コップも一緒に。カバンから取り出して、紙コップを二つ手に持つ。歩くのはパチパチと瞬きをする。

「あったかいお茶。緑茶だけど、大丈夫？」

「ミアさんも長居する気満々だね」

「だって、この前はあんまり歩くんの話聞けなかったし」

とほとほと優しい音を立てながら、緑茶を紙コップに注いでいく。

淡い緑色は、紙コップの中に波紋を広げた。

八割くらい入ったところで手渡すと、歩くんはふうふうと息を吹きかける。

自分の分も用意して、水筒をベンチに置く。

こくん、と飲み干して、ほっと一息ついた。

歩くんは、空を見上げて、沈んでいく夕日を瞳に映している。私もつられて見上げると、先ほどよりも紫色が濃くなった気がした。

「朝が来て、夜が来て、当たり前のように過ごしているけど、美しいよね」

「歩くんって、小説を書いているからかも知れど、詩的だよな時々」

「そう？」

私にとっては、詩的に思える。そして、そんなところを、実はとても好ましく思っていた。

歩くんの目から見えるこの世界は、私の目に映る世界とは違うものが見えているのではない。そう思ってしまう。

緑茶を口を含むと、外の風に一気に冷やされたようで生ぬるくなっている。それでも、冷たいものを飲むよりはいい。

歩くんがくれたティッシュに包んだドーナツを、一口齧る。

口の中の水分が奪われていく。それでも、ジャリジャリした砂糖の粒がおいしい。

今日、緑茶を持ってきたのは正解だったかもしれない。

「ミアさんは、犬が好きなの？」

「え？ 好きというほどでもないかなあ。あ、おばあちゃんの家の犬は好きだよ。それに見れば、かわいいとは思うけどね」

「そっか」

お尻に敷いているクッションの柄を思い出す。柴犬柄だ。

もしかして、私が犬が好きだと思ったから選んでくれたのだとしたら……

好きだよ、と訂正しようとして歩くんを見る。

頬が薄くオレンジ色に、染まっていた。それは、照れの感情なのか、夕日の反射なのかは判断がつかない。

胸の奥がかあつと熱くなった。

おばあちゃんと先生以外に、私に思いを向けてくれる人がここにいる。そんなことを、信じてしまいたくなる。縋りつきたくなってしまう。

私の居場所になってくれる、とか。

「犬とかに生まれ変わりたいって言ってたから、勝手に好きなかと……」

「でも、かわいくて小物とかは犬のもの選んだりする！ すごく嬉しいよ！」

これはいつもの、取り繕ったいい子に見える言葉、じゃない。

心からの本心だった。私を思って、持ってきてくれたこと。選んでくれたこと。それだけで、ぽかぽかと心が満たされていく。

イヤなことばかりの日々なのに、涉くんという時間だけは、幸せな気持ちが体に広がる。

「それなら、よかった」

「涉くんは、毎日ここにいるの？」

「うーん、大体はいるかな」

うんうんと頷きながらも、涉くんは目に空を映し続けている。

私のほうを向いてくれないのに、イヤな気持ちはない。

両親との違いはどこにあるのか、考えてみて、悲しくなってきた。

両親は、私のことをどう思っているんだろう？

自分たちが先に亡くなった時の、姉のための道具？

考えてから、しつくりきて、また死にたい気持ち胸の中で膨らんでいく。そばにいない時くらい、考えなきゃいいのに。

「あー、帰りたくないな」

「もう少しここにいればいいよ」

私は、「二度と」の意味で言ったのに、涉くんは言葉通り受け取る。

そんな素直さが、私には心地よくて「うん」と小さく答えた。

私は涉くんのことを、まだ名前しか知らない。

でも、年齢や高校、家、家族のこととかは、知らなくていい気がした。

それよりも、考えていること、好きなこと、そっちが気になってしまう。

飲み終わりそうな紙コップを握りしめて、何を話そうか、考える。

聞きたいことはたくさんあるのに、どんな話題を選んでいいか、わからない。

「おーい」

声をして顔を上げると、先ほど土いじりをしていたサラリーマンだった。

父より、背が高いかもしれない。黒髪はツンツンととがっていて、もみあげは刈り上げられている。

新任の先生ぐらいの年齢に見えるけど、ちょっとやんちゃそうな髪型も相まって年齢は不詳だ。

そもそも、このぐらいの大人の人は、先生以外知らないから、予想がつかない。スーツ姿に黒い長靴というチゲハゲな格好で、手には土のついた軍手をはめたままだ。

仕事帰りのまま、畑作業をしに来たのかもしれない。

動きにくそうなのに、と思いながら見つめてみると、目の前に真っ赤な丸いは大根が差し出される。うねうねと伸びた根っこにも、土が絡まっている。

かわいらしい形をした六つの実はずやつやと輝き、採れたてなことを鮮明に表していた。

親指と人差し指をくつつけたぐらいのサイズのはつか大根。ラディッシュとも呼ばれる。

お店のサラダとかに入ってるものと変わりにく見える。

その人の意図がわからなくて、私は首を傾げた。

「涉くん、はつか大根いる？」

涉くん、とはっきり呼んだ。

どうやら二人は、元々顔見知りだったらしい。涉くんは小さく頷いてから、ふっと

笑う。

そして、リュックからコンビニのビニール袋を取り出して、広げた。

「サイトウさん、またですか」

弾んだ声で、はつか大根を受け取っている。

そんな涉くんを見つめるサイトウさんと呼ばれた人の目は、優しい。

目尻には、深い笑い皺が刻み込まれていた。

サイトウさんは、隣に座る私をちらりと確認して顎に手を当てた。

「お嬢さんも欲しい？」

初対面の他人に、何かをもらうのは慣れてない。首をぶんぶん、力強く横に振って断る。

「いえ、私は、大丈夫です」

「そっか、再来月の六月頃には枝豆が大量に採れる予定だから、それをあげるよ」

うんうんと勝手に勝手に約束を取り付けて、私から目を逸らす。

当たり前のような、他人との数ヶ月後の約束に、背中がこそばゆい。

サイトウさんは、はつか大根のいいところをツラツラと涉くんに語っている。

「はつか大根はね、消化にもいいし、栄養も豊富なんだ。涉くんに食べさせようと思っただけなんだよ」

「サイトウさんには、自分の作りたいものを作ってくださいっていつも言ってるじゃないですか。もらいますけど」

「涉くんは元気になってももらいたいからね」

軍手を外してからわしゃわしゃと軽く涉くんの頭を撫でて、サイトウさんは満足そうに微笑む。

サイトウさんの目の横の皺が、ますます深くなっている。

涉くんの苗字はわからないけど、サイトウさんと呼んでいることは親ではないはずだ。

なのに、やりとりにはそれくらいの親密さが含まれていた。

羨ましさに似た気持ちを胸に抱えながら、二人を見つめる。

サイトウさんは満足したように私と涉くん二人に「またね」と手を振って去っていった。

「お友だち……？」

はつか大根をリュックにしまう涉くんに向けた言葉は、二人の年齢差を考えるとあまりに不釣り合いだった。

だって相手は社会人の大人で、涉くんは学校にも通っていない子供だ。それなのに、私の目には二人は友だち同士みたいに見えた。

涉くんは、戸惑うことなく頷く。

年も違うのに？ と聞きたい気持ちが、体の中で湧き上がる。言葉がうまく出ない。

「サイトウさんとは、ここに来るようになってから知り合ったんだ」

「そうなんだ」

「で、お菓子を食べる時に目が合ったから、あげたら仲よくなってるね。体が弱いことを知って、いつもああやって栄養豊富な野菜をくれんの。優しいでしょ」

涉くんの表情は、誇らしげだ。遠慮して私はいらないと言ったけど、欲しいと言えばきっとサイトウさんは優しくと一緒に分けてくれた。

野菜が欲しかったわけじゃないけど……

「友だちになれるんだね」

驚きと嫉妬から、つい言葉に出してしまつて、涉くんの表情を確認する。

陰ることなく、むしろ、ピカピカと輝き出しそんな笑顔で、うんうんと首を縦に振っている。

「サイトウさんは、ここでの友だち。ミアさんと一緒」

「私と涉くん、友だちだったんだ」

「えっ、違った？」

「違つていうか、連絡先も知らないし、年齢も苗字も知らないし、なんというか、

友だちだったんだ、って感じ」

友だちっていうのは、いつも、一緒に過ごすような人のことだと思っていた。

西音さんと周りの人たちのような。

トイレにまでみんなと一緒に行って、くだらない話をする。

そして、学校から帰っても夜までずっとメッセージのやり取りをするような。

友だち……

噛み砕いてみても、しっくりとこない。だって私は、障がい者の妹だ。普通の人、じゃない。

小学生の頃から、クラスメイトに幾度となく言われてきた言葉が脳内を過^{よぎ}っていく。みんな、障がい者の家族だからと言って、私を普通の人扱いしてくれなかった。

西音さんも話しかけてくれるけど、それは、私というおもちゃを楽しんでいるだけ。話しかけてくれる子や、一緒に移動教室に行ってくれる子たちも、いなかったわけじゃない。

守ってくれるような、寄り添ってくれるような友だちがいたらいいなと、空想したこともある。でも、仲よくしてくれた子たちも、自分の身に被害が及びそうになったら、私を置いてシレッと逃げていった。

涉くんは「友だち」と言われたことが、イヤな気持ちになったとかそんなことは

ない。

ただ、友だちが実感としてわからなかった。

一人で思案していると、心配そうな表情の涉くんに気づく。

慌てて手を横に振って、否定する。

「イヤとかじゃなくて、びっくりしたの。友だちって思っているんだって」

「連絡先知りたいなら教えるよ」

涉くんはポケットからスマホを取り出して、私の前にQRコードを表示させる。

私もスマホを出して読み込むと、涉くんは「これで友だちだね」と宣言した。

笑った時に見えた歯があまりにも白くて、眩しくて、目を細めてしまう。

自分でもコントロールできないくらい、口元が緩んでいる。

心が、溶けていくのが、わかった。

涉くんは、私の居場所になっちゃった。死にたくないなって、思っちゃうな。

「うん、友だち、だね」

「じゃあ、友だち置いて死なないよね」

涉くんは、ドキッとする返答をしてきた。私の気持ちを読み取ったかのような、質問。

答えられなくて、考え込んでしまう。死にたくないとは思った。ここにいる間はあまり考えなくなっていたけど、まだ死にたい気持ちには心を占拠している。

家や学校にいれば、限界はどんどん近づいて、私の心を締め付けた。そして、「死にたい」が親しげな顔をして、「ほら死のうよ」と迎えにくるのだ。

だから、すぐに頷くことができなくて「えーと」「うーん」と音にならない言葉で濁そうとした。

涉くんの表情を見るのが怖くて、消えていく夕日を目で追う。紫色から濃い群青色に、移り変わっていく。

「僕はイヤだよ、友だちが死ぬの」

追い打ちをかけるような言葉に、喉が締まる。

私だって生きていたいよ。でも、ここ以外地獄ばかりなんだ。

涉くんに目をやると、瞳が悲しそうな黒に染まっていく。

涉くんという時間だけが、ちゃんと呼吸できる。普通の人間でいられる。だから、もしかしたらと淡い希望を抱いてしまう。

でも、家や学校に行けば、地獄は変わらず始まるから。

涉くんの悲しそうな視線から逃げるように、空を見上げる。

薄暗い青色と紫色の上に、雲がふわふわと流れていく。

やけに、風が強く感じてしまう。

どうしても、「死なないよ」とまだ答えられなかった。

辛い時間を、これ以上一人で乗り越える術が見つからないから。

「わかった、じゃあさ」

あまりにも黙り続ける私に、痺れを切らしたのか涉くんは手をポンツと叩いた。

そして、わざとらしく口元を緩めて、私のほうを向く。

いつのまにか、畑作業をしていた人たちのガヤガヤと話している音が聞こえなくなっていた。

「僕も一緒に考えようかな」

「何を？」

「ミアさんが、死なないって答えられるようになる方法」

輝かしい未来を見つめるように、涉くんは、私を見つめた。

どうしたら、答えられる？

わからなくて、ただ、涉くんの黒い瞳を見つめる。

涉くんの目の中に吸い込まれそうで、無意識に足を踏ん張っていた。プルプルと手も、膝も震えている。

そんな私の隣で、涉くんが急に両手で口を押さえて、ゴホゴホと咳き込み始めた。
「えっ、大丈夫？」

慌てて温かい緑茶を、紙コップにもう一度注いで渡す。

そして、背中をさすると、楽になったようでふうっと長い息を吐き出していた。

私が差し出した緑茶を一口飲み込んで、涉くんは「ありがとう」と声に出した。

そんな体が弱いのに、外にいて大丈夫なんだろうか。

自分の死にたいより、そちらに氣を取られてしまう。

「それでいい？」

「でも、わかんないよ、そんなのが見つかるかどうかも」

「見つからなかったら、見つかるまで続ければいいんだよ」

樂觀的な涉くんの言葉に、何も返せなかった。散々、考えたことだったから。

胸の中でざわざわというんな感情が、揺れ動いていく。

涉くんとなら、きっと生きていて楽しい。

四六時中一緒にいたら、死にたいなんて考えなくなるかもしれない。でも、家に帰れば、私は透明人間になる。学校に行けば、可哀想な人間になってしまう。

立ち読みサンプル はここまで



まだ少し肌寒い風に吹かれながら、横でパソコンに打ち込む涉くんを盗み見る。

涉くんが「いつでも来ていいよ」と言ってくれた言葉を信じて、私は何度も屋上に足を運んでしまっていた。

「ごめん、ずっと小説書いてて」

私の視線に気づいたのか、涉くんは申し訳なさそうな表情で顔を上げる。

カタカタと鳴るタイプ音が心地よかったと答えるのは、変だろうか。

小さく首を横に振る。大丈夫と伝わるように、唇を歪めて。相変わらず、うまく笑えない口元が張り付いたようにぐぐぐと動く。

涉くんは私のそんな表情を否定することなく「よかった」と安心したように笑った。その笑顔があまりにも眩しくて、空を見上げる。

晴れて澄み渡った空の色は、相変わらず目に突き刺さった。涉くんが気まずそうなのが氣になってしまって、目についたものから適当に口にする。

「雲一つない、空だね」

「蒼穹っていうんだよ」